

『紫式部日記』、女房描写から見る紫式部の対人意識

飯田悠花

はじめに

『紫式部日記』内に登場する人物は、中宮、道長、女房、君達など多岐にわたり、普段紫式部が接する機会の多い同僚の女房に対する記述も非常に多い。そこで、それぞれの人物の描き方に注目することによって、紫式部が持つ対人意識を見ることができるとはないかと考えた。また、消息文的部分の前後では女房達一人ひとりに対する紫式部自身の見解が連続して述べられており、女房への意識を追う上で非常に重要な部分であると言える。本稿では、消息文的部分の前後の女房に対する描写を中心に、紫式部が他の人に対しどのような意識、感情をもっているのかを探っていききたい。

一 構成と成立

『紫式部日記』の全体を見ると、内容の面から

(1) 寛弘五年秋から寛弘六年正月三日までの日記的部分

(2) 消息文的部分

(3) 断簡

(4) 寛弘七年正月一日から十五日までの日記的部分

の四つの部分に分けることができる。(1)では中宮の敦成親王出産に始まり、産養の盛儀、一条天皇の行幸、五十日の祝宴が描かれる。

中宮の内裏還啓の前後から新皇子関係のことは退いていき、宮仕えに対する紫式部の雑感が強くなっていく。六年初頭の行事の記述に転じた日記は、女房の衣装・容姿の描写から(2)消息的部分の記述に移行していく。女房の容姿・心性の描写、齋院方と中宮方の気風の比較、紫式部自身の生きざまや仏道への志向が書かれた後、消息文の末尾を思わせる叙述によって結ばれる。この後(3)年時未詳の断簡、(4)の敦良親王五十日の盛儀の記録を描いた日記的部分が置かれ、『紫式部日記』は終わる。

このような作品がいかにして成立したかということについて、様々な論議がなされてきた。江戸期、安藤為章は『紫女七論』⁽¹⁾において

その日記むかしは定めて数十年の巻々ありぬへけれど世に傳はらざるは不幸といふへし今傳る所の日記は僅に其殘篇と見ゆと指摘している。これに端を發し、現存日記の殘欠説が打ち出された。また、この欠落の問題について池田龜鑑⁽²⁾は

この日記の原型を推定する一つの資料として注意すべきは、宮内省図書寮所蔵の日記歌（紫式部）写本一冊である。

と、「日記歌」の存在を明らかにした。

この本を、紫式部日記歌とよぶようになったのは、いかなる理由なのか、はっきりと分からない。編者が、紫式部日記の中から抄出して、そのゆえに紫式部日記歌とよびならわせたのかも知れない。そうするとこの本の中の歌は、すべて紫式部日記の中の歌であるべきはずである。（中略）

作者不明の歌が、紫式部自身の歌であり、かつ、赤染衛門の歌も、もと紫式部日記の中に引用されていたものと見れば、この日記歌は、紫式部日記の原本によって抄出したものといえよう。この「日記歌」を論拠として、現存日記は寛弘首部が欠落してしまつたものであるという首欠説が打ち出された。一方岡一男⁽³⁾は

(4)の五月五日なる語⁽⁴⁾は、それが「日記歌」においても不要な文字であるだけに編者が恣意に加へたものでなく、その原典に存したのであらう。そしてその原典は既述の理由で日記ではなく、家集であつたらうと思はれるのである。その家集は無論流布本でも現存の異本でもなく、今は散逸した古本である。（中略）

この古本は他撰の紫式部の家集であつたと思ふ。土御門院の呼稱が行成の『權記』などに散見するところを見ると、これは當時の男子の用語で、多分古本家集は紫式部の歿後、父の爲時が紫式部の自薦の家集及び歌反古をもとに編纂した廣本であつたらう。

と述べ、「日記歌」の原拠を「古本紫式部集」に求めている。また、この冒頭の文章は、この日記の主題の中宮御産といふ事件を描くに適切な威嚴と感覺の繊細と詞藻の洗練をもつて、その時處位・環境、主人公中宮の御性格、それに仕へる筆者の讚仰と心境を簡潔に描いてゐて、この日記の序曲としていかにもふさしいのである。

として首欠説に反論を唱えた。これらをうけ、秋山虔⁽⁵⁾は「外証からすれば首欠説に、内証からすればその反対説に、それぞれ加担しなければならぬ」と評し、外証から見れば首欠説が優勢であるものの首部欠落の是非をめぐる問題は未だに決着がつかないでいる。

また、現存する『紫式部日記』の成立について、消息文に対する問題もまた様々な議論がなされてきた。関根正直⁽⁶⁾が

六年正月三日と、十一日との間にいと長き文ありて、同僚女官の容姿を評し、はては餘所の女性の才能を品隲して、まゝ自己の動靜用意に及び述懐やら感想やら、教訓めきたることにも涉りて、さらに日記の體にあらず。（中略）

寛弘六年正月三日の次に、同輩宮人を評し、自己の所懐を漏らせる數節は、必ず式部より他人に送りたる消息文なるべし。（中略）

彼の消息文はた別に寫し博し、いつしか本文と共に寫しとられ

て、一つに綴られたるものと見ゆ。

と提唱したことから消息文混入説が唱えられた。これに対し岡一^⑦は

ひとたび宣旨の君・大納言の君・宰相の君の姿態批評に移るや、「この次ぎに人のかたちを語り聞えさせば、物言ひさがなくや侍るべき」と、北野三位の女の宰相の君・小少将の君・宮の内侍ら同僚の容貌の品定に移るのは必然となり、そこに何ら所謂手簡の混入を思はせるものはない。

と述べ、さらに

中宮の侍女たる紫式部が單に宣旨の君といへば、それは宮の宣旨をさすことは明瞭で、『日記』の讀者もそれをあやまることはない。殿の宣旨ならば、大式部、又は式部とよび、敬稱をつけるなら君をもちひず、おもとをもちひたであらう。従つて、元三の記事に「宣旨の君」とあつて、「宮の宣旨」とも「殿の宣旨」ともないところから、この部分を日記からひきはなし、手簡の混入とすることの非は、いふまでもあるまい。

として消息文混入説に批判を唱えた。以上を受け首部欠落の問題、消息文混入の問題を矛盾なく解決しようと提唱された説が、二段階成立論である。石川徹^⑧は

「消息文」の所が純粹に書簡文体であるといふ事が紛れもない事実であると同様に、「日記体」の所が、一応日記文体であると共に、既述の如く侍りなどの語を伴ふ準書簡文体でもあるといふ事も、亦どうしようもない事実であり、ためにしに消息文と呼ばれる部分を除き去つてみた所であとに猶、完全には日記文体とは謂ひにくい書簡風日記体が残るのはいかに考へたら合点が

往くであらうか。この一見矛盾にも似た不思議を、不思議でも

矛盾でもなくする為には、備忘録様の原日記の先行を想定するのほかに途はないと思はれる。(中略) 原型紫式部日記は、寛弘五年秋或はそれ以前から、折々に書かれて彼女の手許にあつたのであらうが、寛弘五年秋に至り、かねて宮仕へ志望、又は宮仕への様子を知りたがつてゐる継娘などの若い娘に対し、その参考として中宮御産日記ともいふべき部分を抽出して贈らうと思つた彼女が、嘗ての彼女自身の書いた原稿を、更にみづから書き直して与へたのが大凡今日見るが如き紫式部日記だつたのであらう。そしてその書写の際、相手を意識したので、原日記の通りには書写せず、自然と「侍り」の如き謙讓語が入り、又相手によく判らせる為に註を加へて説明し、更に二年前の昔に遡つて書きはじめたのだから、おのづと回想の語や文も添へられるに到つたのではあるまいか。そして寛弘六年正月三日の宰相の君の有様を叙べた条に到つた時に、この雨夜の品定めの筆者は、どうにも朋輩達の評判がしたくてたまらなくなり、原日記を全く離れて、自由に現在の所懐を書き綴つて了つたのであらう。

と述べ、備忘録風の原日記が先行してあり、それを消息風に書き改めたのが現存日記であるとした。

『紫式部日記』の成立には様々な説があるが、諸説入り混じつており定説は明らかになつていない。

二 消息文的部分における女房描写

日記的部分から始まる『紫式部日記』は寛弘六年正月三日戴餅の

儀式に出席した女房の衣装・容貌の描写から、容姿・心性の描写を列挙した消息文的部分へと移行していく。

消息文的部分の冒頭には、

このつゝに、人のかたちを語りきこえさせば、ものいひさがなくや侍るべき。たゞいまをや。さしあたりたる人のことは、わづらはし、いかにぞやなど、すこしもかたはなるは、いひ侍らじ。⁽⁹⁾

とあり、この後に宰相の君、小少将の君、宮の内侍、式部のおもと、若人、宮木の侍従、五節弁、小馬と同僚の女房に対する批評が続く。

この一連の描写は

かういひいひて、心ばせぞかたうはべるかし。それもとりどりに、いとわろきもなし。又すぐれておかしう、心をもく、かどゆへも、よしも、うしろやすさも、みな具することはかたし。

さまざま、いづれをかとるべきとおぼゆるぞ、おほくはべる。

という文により一度収束する。ここで注目したいのは、「人のかたち」から始まった女房批評をうけて、「心ばせ」への着目によって終結するということである。この「心ばせ」について、萩谷朴は『紫式部日記全注釈 下巻』⁽¹⁰⁾で次のように述べている。

「心ばせ」とは「心のはたらき」「気だて」「性質」といった意味であるが、ここでは、女性の評価の基準として、外見の容貌・

容姿・挙措動作に対して、内面的な情操・心性といった範疇を問題にしているわけである。

これらを踏まえると、紫式部は「人のかたち」といった外見的要素と「心ばせ」という内面的要素を意識的に区別しているという事が分かる。寛弘六年正月三日から消息文的部分にかけて描写がなさ

れている女房は、宰相の君、大納言の君、宣旨の君、北野三位宰相の君、小少将の君、宮の内侍、式部のおもと、小大輔、源式部、小兵衛・少弐、宮木の侍従、五節弁、小馬、の十四名である。このうち、外見的要素である「人のかたち」について描写がなされているのは、宰相の君、大納言の君、宣旨の君、北野三位宰相の君、小少将の君、宮の内侍、式部のおもと、小大輔、源式部、宮木の侍従、五節弁、小馬の十二名。内面的要素である「心」について描写されているのは宣旨の君、北野三位宰相の君、小少将の君、宮の内侍の四名。本稿では、この「人のかたち」と「心ばせ」の二つの側面に焦点をあてる。

三 外見的要素に対する意識

消息文的部分の始めにはこれから「人のかたち」について見ていくということがはっきりと述べられている。その際に、「すこしもかたはなるは、いひ侍らじ」と記述されていることから、ここで述べられるのは欠点の無いと思われる人、紫式部にとって美しいと感じる人についてであることが分かる。では、紫式部はどのような点をおまじいと感じているのだろうか。前述した外見的要素について描写がなされている女房十二名のうち、特に詳細に述べられている女房に着目すると、次の四名が挙げられる。以下、評価の観点とされる部分を□で囲み、それぞれについて検討する。

宰相の君

いとおかしげに、髪(D)などもつねよりつくるひまして、や

うだい(A)・もてなし(A)、らうらうじくをかし。丈だち(B)

よきほどに、ふくらかなる人(B)の、顔(C)いとこまかに、

にほひをかしげなり。

(A) 様子

↓「らうらうじくをかし」とあることから、洗練されている様、気品のある様を感じられる。

(B) 体型

↓ちようどよいくらいの背丈で、ふつくらとしている。

(C) 容貌

↓「いとこまか」「にほひをかしげ」とあり、繊細な美しさ、色艶の美しさを見出している。

大納言の君

大納言の君は、いとさゝやかに、小さしといふべきかたなる人

(B) の、白うつくしげに、つぶつぶと肥ゑたるが、うはべ

はいとそびやかに、髪(D)、丈に三寸ばかりあまりたる裾つき

(D) 髪ざし(D)などぞ、すべて似るのもなく、こまかにう

つくしき。顔(C)もいとらうらうじく、もてなし(A)など、

らうたげになよびかなり。

(A) 様子

↓「らうたげになよびかなり」とあることから、洗練されている様や気品のある様、物柔らかな優美さを感じられる。

(B) 体型

↓背丈は小さく、まるまると太っているが見た目はすらりとしている。

(C) 容貌

↓「いとらうらうじ」とあり、上品さを見出している。

(D) 髪

↓「裾つき」「髪ざし」などいくつかの部分に視点が向けられており、数字を用いて具体的に描写されている。

宣旨の君

宣旨の君は、さゝやけ人(B)の、いとほそやかにそびへて、

髪(D)のすぢこまかにきよらにて、生ひさがりの末より一尺

ばかりあまり給へり。

(B) 体型

↓小柄で、とてもほっそりと伸びたような感じの体型である。

(D) 髪

↓すみずみまで整った美しさが見出され、数字を用いて具体的に描写されている。

宮の内侍

又いときよげなる人(A)。丈だち(B)いとよきほどなるが、

あたるさま(B)、姿つき(B)、いともものしく、いまめい

たるやうだい(A)にて、こまかに、とりたてておかしげにも

見えぬものから、いと物きよげに、そびそびしく、なか高き顔

(C)して、色のあはひ、白さなど、人にすぐれたり。頭つき

(D)・髪ざし(D)・額つき(D)などぞ、あなものきよげと

見えて、はなやかに愛敬づきたる。

(A) 様子

↓「きよげなる人」「いまめいたる」とあり、清楚な綺麗さ、現代的で晴れやかな様子が見出されている。

(B) 体型

↓ちようど良いくらいの背丈で、座っている様子や姿勢好は堂々

としており、すらりとした体型である。

(C) 容貌

↓「なか高き顔」とあることから鼻筋の通った顔立ちであり、顔の色合いや肌の白さに焦点が当てられている。

(D) 髪

↓「頭つき」「髪ざし」「額つき」など様々な部分に焦点が当てられている。

評価がなされている対象に注目すると、見た目の美しさは主に、「やうだい」や「もてなし」といった(A)様子、「丈だち」等の(B)体型、(C)容貌、(D)髪、という観点に基づいていることが分かる。(A)様子は、洗練されている様や気品のある様、物柔らかな優美さ、清楚な綺麗さ、現代的な様など多様な美が見出されている。(B)体型に関しても、ふっくらとした体型、ほっそりとした体型、小柄な様、すらりと伸びている様子など対照的な体型についてそれぞれが肯定的に捉えられている。また、(C)容貌についても繊細な美しさや上品さ、色艶の美しさ、肌の白さ、鼻筋の通った顔立ちなど様々な美しさが捉えられている。これらから、紫式部は外見に対し固定観念を持っておらず、人物固有の美しさを捉えていると言えるだろう。一方、(D)髪に対しては長さ、多さに対して美を見出ししている。「裾つき」「髪ざし」「生ひさがりの末」「頭つき」「額つき」など様々な部分に焦点が当てられており、形容表現のみならず数字を用いて具体的に量の多さや長さを描写している。髪が長く多いことが女の容姿に重要であることは平安期の一般的な感覚であるが、紫式部は特に頭髪に対する関心が強いと言えるのではないだろうか。

四 内面的要素に対する意識

女房批評は、次のように結ばれる。

かういひいひて、心ばせぞかたうはべるかし。それもとりどりに、いとわろきもなし。又すぐれておかしう、心をもく、かどゆへも、よしも、うしろやすさも、みな具することはかたし。さまざま、いづれをかとるべきとぞおぼゆるぞ、おほくはべる。さもけしからずも侍ることどもかな。

女房の外見的要素についての批評を述べてきたことを受け、それに対し「心ばせ」といった内面的要素への注目に移行している。そして、内面的要素において満点の人間はおらず、どの点をとつたら良いのかも分からない、と結んでいる。しかし、二章でも述べた通り実はこれまでの女房批評の中で「心」に着目し描写されている部分も少なからずあるのである。

宣旨の君

いと心恥づかしげに、きはもなくあてなるさまし給へり。ものよりさしあゆみて出でおはしたるも、わづらはしう心づかひせらるゝ心ちす。あてなる人はかうこそあらめと、**心ざま**、ものうちのたまへるも、おぼゆ。

「きはもなくあてなるさまし給へり」「あてなる人はかうこそあらめ」等、身分の高貴さに注目が置かれている。高貴さを感じる点として「わづらはしう心づかひせらるゝ心ち」がすることを挙げていることから、こちらが心遣いをせずにはいられないような様子を評価しているのである。

小少将の君

もてなし心にくく、**心ばへ**なども、我心とは思ひとるかたもなきやうにものづみをし、いと世を恥ぢらひ、あまり見苦しきまで児めい給へり。腹きたなき人、悪しざまにもてなしひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をもうしなひつべく、あえかにわりなき所つゝ給へるぞ、あまりうしろめたげなる。

奥ゆかしくひどく遠慮をするような「心ばへ」、こちらが見ていて苦しく感じるほどの子供らしい純粹さ、気がかりになるような弱々しさやどうしようもないさまを小少将の君には見出している。ここで注意したいのは、小少将の君と紫式部の関係性である。新日本古典文学大系の『紫式部日記』の注一五において「作者の親友」と表記されており、また新潮日本古典集成の『紫式部日記』の注において「小少将の君は作者の親密感をもった女房である」とある。小少将の君は紫式部にとって親しみのある人物であり、「児めい給へり」「あえかにわりなき所つゝ給へる」という記述は否定的に捉えたものではない。

北野三位の宰相の君

心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、又いと恥づかしき所そひたり。

宮の内侍

たゞありにもてなしして、**心ざま**などもめやすく、露ばかりいづかたざまにもうしろめたいかたなく、すべてさこそあらめと、人のためにしつべき人がらなり。艶がりよしめくかたはなし。

兩人ともに「心ざま」の評価として「めやすし」という形容表現が用いられており、見苦しきのないことが重要視されていることが分かる。そして自然のままの振舞に対し、紫式部はめやすさを見出している。このことは、最後に加えられた「艶がりよしめくかたはなし」という記述からも見取ることができる。「艶がり」「よしめく」という表現に対し、萩谷朴は『紫式部日記全注釈 下巻』で次のように述べている。

「艶」という美意識語は、媚めかしい、色っぽいといった、やや官能的な女性美から、女性的な優雅さを本質としたより高らかな美的表現にまで、幅広く用いられている。しかし、そのように「艶」であろうと意識して振舞うことを示す自動詞「艶がる」となると、上品な美しさを目的としたものであっても、そこにはわざとらしい物欲しげな人間の心性が露呈することとなる。「由めく」も同様であつて、「由」という名詞ないしは「由あり」という客観的な状態を表現している動詞にあつては、それは奥ゆかしい風情・趣向というものを指示しているが、「由めく」となると、そこに物欲しげな醜さが加わってくるのである。

「艶がりよしめく」とは「艶」「由」であろうと意識し振舞うことであり、自然のままの振舞と対比されて描かれているのである。

以上の「心」に対する描写を見ていくと、

・こちらが心づかいをせずにはいられないような人物に対して、肯定的である

・自然のままに振る舞うことが、見苦しきのない良い「心ざま」である。

・奥ゆかしく遠慮がちな「心ばへ」に肯定的である

という特徴を見ることができるといえる。

では、紫式部が批判的に捉える「心」とはどのようなものだろうか。はつきりと批判的に描いている人物である清少納言について見ていく。

清少納言

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書きちらして侍ほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人にことならんと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみ侍ば、艶になりぬる人は、いとすごうすゞるなるおりも、ものあはれにすゝみ、をかしき事も見すぐさぬほどに、をのづから、さるまじくあだなるさまにもなるに侍べし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよく侍らん。

清少納言は藤原定子に仕えており、仕える対象が異なることから紫式部にとって同僚の女房とは言えない。また、清少納言が定子に使っていた時期は九九〇〜一〇〇〇年、紫式部が彰子に仕え出したのは一〇〇五年（一説には一〇〇六年とも）であり、出仕の時期もかぶってはいない。¹² 紫式部が近しく接しているわけではない人物についてこうも悪しざまに述べていることについては、何かしらの意図が働いているだろう。しかし今回はその理由については言及せず、批判がなされている対象にのみ着目する。「さかしだち」ていること、「艶になりぬる」ことが批判の対象となっており、これらから「かく、人にことならんと思ひこのめる人」と判断しているのである。宮の内侍への記述と合わせると、人より際立って見せようと自然ではない、意識した振舞に対して非常に強い反感を抱いているよ

うである。

女房一人ひとりへの批評を終え、紫式部は消息文的部分の終わりに女のあり方の総括を述べている。

さまよう、すべて人はおひらかに、すこし心をきてのどかに、おちみぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしもをかし、心やすけれ。もしは、色めかしくあだあだしけれど、本性の人がらくせなく、かたはらのため見えにくきませすだになりぬれば、にくうは侍まじ。我はと、くすしくならひもち、けしきことごとしくなりぬる人は、立ち居につけて、われ用意せらるゝほどに、その人には目とどまる。目をしとどめつれば、かならず、ものをいふ言葉の中にも、気てみるふるまい、立ちていくうしろでも、かならず癖は見つけらるゝわざに侍り。物いひすこしうちあはずなりぬる人と、人の上うちをとしめつる人とは、まして耳も目もたてらるゝわざにこそ侍べけれ。人の癖なきかぎりには、いかではかなき言の葉をも聞こえじとつゝみ、なげの情つくらまほしう侍り。（中略）それを、われまさりていはんと、いみじき言の葉をいひつけ、向かひあてけしきあしうまもりかはずと、さはあらずもてかくし、うはべはなだらかなるとのけぢめぞ、心のほどは見え侍かし。

「おひらか」「心をきてのどか」「おちみぬる」といった表記から、紫式部は穏やかさや落ち着きといったものに対し「心」の良さを見出している。また、「本性の人がらくせなく」「かたはらのため見えにくきませすだになりぬれば」等見苦しき無きことへの強調がここでも見られる。ここで言う癖や見苦しきとは「けしきことごとしくなりぬる人」「われまさりていはん」とする人のことであり、自

分をよく見せようと意識して振舞う人への批判が再三にわたり述べられているのである。これらと合わせると、「うはべはなだらかなる」とは表面を取り繕うというよりは、奥ゆかしさといったものへの評価であるだろう。

ここまで、個人に対する評価と総括とをみてきた。これらを合わせてかんがみると次のようになる。

紫式部が好ましく感じる「心」

・こちらが心遣いをせずにはいられないような奥ゆかしさをもっていること

・見苦しきの無い、自然のままの振舞であること

・穏やかさ、落ち着きをもっていること

紫式部が批判する「心」

・自分は「艶」「由」があると意識して振舞うこと

五 まとめ

前段までで示してきたとおり、紫式部は人間の外見の要素、内面的要素の二面を意識し人物を捉えている。

外見の要素では、様子や、容貌について多くの形容表現を用いて様々な美しさが捉えられている。体型においても対照的なあらゆる見た目の人物を肯定的に捉えており、好みの傾向はあまり偏っていないことが分かった。一方で、頭髮に対する描写が非常に細かいことから、髪に対する関心は一般的な感覚よりも強いと言えるだろう。

内面的要素では、紫式部はどの点においても満点の人間はいないという考えを持っている。しかしその上で、好ましく感じる「心」と批判の対象となる「心」があることが分かった。他人に相対する

際、奥ゆかしさや穏やかさ・落ち着きのある人、見苦しきの無い自然のままの振舞である人に対しては好感を持ち、「艶」「由」を見せようと意識して振舞う人物に対して反感を抱くのである。本稿では『紫式部日記』のみでの人物評を検討したが、これを基に、他作品との比較を行って、紫式部の特色をより明らかにしていきたい。

注

(1) 『紫女七論』安藤為章著、元禄一六年〔国文注釈全書 第三卷〕、室松岩雄編、すみや書房、1967 所収)

(2) 『宮廷女流日記文学』(池田亀鑑著、至文堂、1927)

(3) 『源氏物語の基礎的研究』(岡一男著、東京堂、1954)

(4) 『異本紫式部集』の中の「日記歌」と細字傍注のある十七首の歌郡のうち、四番目にあたる歌の詞書に五月五日の日付が示されている。

(5) 『紫式部日記』(日本古典文学大系 19、池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔

校注、岩波書店、1953)

(6) 『紫式部日記精解』(関根正直著、明治書院、1924)

(7) 注3に同じ

(8) 『古代小説史稿』(石川徹著、パルトス社、1958)

(9) 『紫式部日記』本文の引用は全て新日本古典文学大系の『紫式部日記』(新日本古典文学大系 24、伊藤博校注、岩波書店、1989) によった。

(10) 『紫式部日記全注釈 下巻』(萩谷朴著、角川書店、1973)

(11) 『紫式部日記』(新潮日本古典集成、山本利達校注、新潮社、1980)

(12) 『紫式部日記』(新日本古典文学大系 24、伊藤博校注、岩波書店、1989)、『紫式部日記全注釈』(萩谷朴著、角川書店、1973) を参考とした。

(いいだ・ゆうか／横浜国立大学学部生)